

群 教 セ	G07	02
	平15.215集	

心と形に残る家族のコミュニケーションを求めて

主 題 実践する喜びを味わい、家族の一員としての
自覚を高める家庭科指導の工夫
『家族ふれ合い便』の活用を通して



特別研修員 丸山 晶子（藤岡市立美土里小学校）

研究の概要 本研究は、児童が家庭でできることを見つけ、考え、実践する過程に、家族間で思いや願いをやり取りするワークシート形式の『家族ふれ合い便』を導入することで、家族の一員としての自覚を高めるものである。家庭の仕事や団らんの計画立案と実践後に児童と家族がコメントを交換し、ファイリングしてきたことで、コミュニケーションの蓄積を視覚的にもとらえて実践の喜びを味わい、より能動的に児童が家族とかかわるようになった。

キーワード 【家庭 小学校 家庭生活 家族関係 コミュニケーション 学習方法】

触れ合いを求める子どもたち

現代社会において、科学技術の発達による物質的な豊かさや情報化がもてはやされる一方で、人間関係の希薄化を一因とする諸問題が発生している。人間関係の希薄化には様々な要因が考えられる。その中で、人同士のかわりによって成り立つ社会の、最も核となる家庭における家族間の結び付きに解決の糸口を求めつつ、学校教育の在り方も問われている。折しも、家庭科教育に「家族の在り方や家族の人間関係などの一層の充実」を図ることが求められている。

小学5年の本学級の児童の多くは、「好きなことができる」、「安心していられる、安心して話ができる」という理由から、家族と一緒に過ごすことを楽しいと感じている。しかし、家族と過ごすよさを感じながらも、実際には生活時間のずれから家族全員がそろわなかったり、家族みんなで何かをすることが少なかったりしてそれを不満に思っている児童もいる。それでいて、仕事を進んで手伝うなど、自分から家族に働きかけることは少ない。

これらのことから、家族との触れ合いを求めている児童たちに、家庭科の学習を通して

自分からもできることがあることに気付かせ、その実践が家族の触れ合いを深めることにつながることを、体験を通して実感させることが大切ではないかと考えた。

そこで、『家族ふれ合い便』

『家族ふれ合い便』とは、家族のコミュニケーションを重視したワークシートで、学校での実習・製作や家庭での実践への意欲を高め、実践する喜びを味わうことで家族の一員としての自覚を高めることを目的としている。

児童が学習過程における気付きや考えを家族に投げかけ、それに対して家族がアドバイスや励ましを送る。これをもとに自分の考えを決定したり計画を改善したりするなど、自分の思いや考えと家族の思いやアドバイスをキャッチボールする^(図1)という、家族との触れ合いの手段として考えたものである。

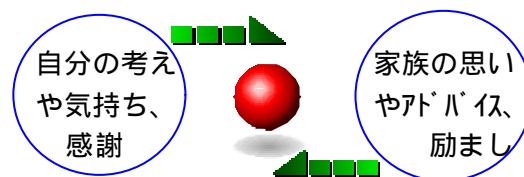


図1 『家族ふれ合い便』による思いのキャッチボールのイメージ図

研究のねらい

児童と家族がコメントを交換し合う『家族ふれ合い便』を取り入れることにより、家族との触れ合いを実感して実践する喜びを味わい、家族の一員としての自覚が高まることを実践を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 小題材の導入部に「家族ウォッチング」という観察行動を取り入れることにより、家族の思いや行動及び家庭生活上の問題に気付き、解決すべき課題としてとらえることができるであろう。
- 2 課題解決のための実習計画・家庭での実践計画の立案段階に『家族ふれ合い便』を取り入れることにより、実践への意欲や自信を高めることができるであろう。
- 3 家庭での実践において「家族ウォッチング」と『家族ふれ合い便』を取り入れることにより、家族に役立つことを喜びと感じ、家族の一員としての自覚を高めることができるであろう。

研究の内容と方法

- 1 “家族のために”という児童の思いを生かした題材の組立
 小学5年の1学期は、学習経験も家庭での生活体験も少ない。したがって、家庭の仕事への関心を高め、家庭生活に協力するのに必要となる基礎的な知識と技能の定着を図ることが大事である。そのため、「どのように生活しているかな」と「わたしにできることは」という2つの題材をそれぞれ単独で扱い、指導した。2学期は、1学期の学習を通して芽生えた児童の“家族のために”という思いを実現するために「家族との食生活をより楽しくするために作る」という視点に立ち、2つの題材の各内容を複合させて図2のように組み立て、新たに「家族のために作って楽しく、作っておいしく」という題材を設定した。

2学期の題材	扱う内容
作って楽しく使おう	(2)(3)
家族のためにという児童の思い	(1)
作っておいしく食べよう	(4)(5)

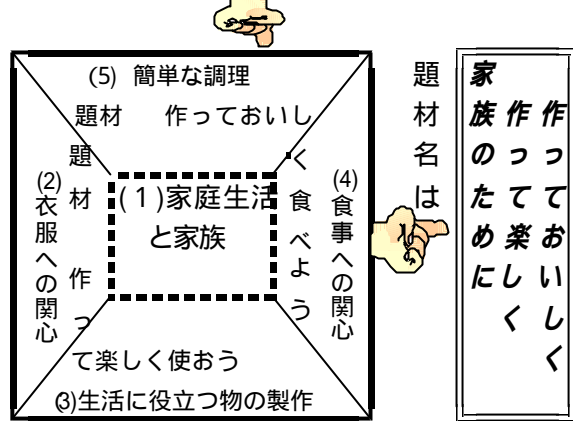


図2 2学期の題材の組立

2 研究の構想

(1) 家族を巻き込もう

学校での学習で家族との触れ合いを指導するには、家庭との連携が必要不可欠である。児童が学習を通して身に付けた知識や技能を土台に家族とのコミュニケーションをとりながら実践できるようにするため、『家族ふれ合い便』を取り入れる趣旨を学級通信で知らせ、保護者への協力を依頼した(資料編参照)。

(2) 家族の思いを「家族ウォッチング」

家庭での実践へのアプローチとして、まず「家族ウォッチング」を取り入れる。これは、家族の思いや行動、家庭生活上の問題点に気付かせるとともに、実践が家族にもたらす効果を把握させる目的で、題材の導入部や家庭での実践時における観察行動である。これにより、自らの気付きに基づく主体的な学習活動が展開されていくと考える。

(3) 『家族ふれ合い便』の導入で児童の意識はこう変わる

自らの気付きに基づく行動が、家族に喜ばれたりほめられたりする、つまり家族に好ましい影響を及ぼしたという成功体験の積み重ねは、やがて「自分が努力し、行動したことは家族のために役立つ」という自信へとつながると考える。この自信が実践する喜びを増幅させ、実践の喜びを味わうようになった児

童は、家庭生活を支えている衣食住の仕事や家族の思いに対して探求心を持ち、自分にできることについてさらに深く考えるようになると思われる。

図3は、児童の意識が『家族ふれ合い便』の導入によってどのように変わっていくかを想定して学習過程に位置付け、研究の構想としてまとめたものである。

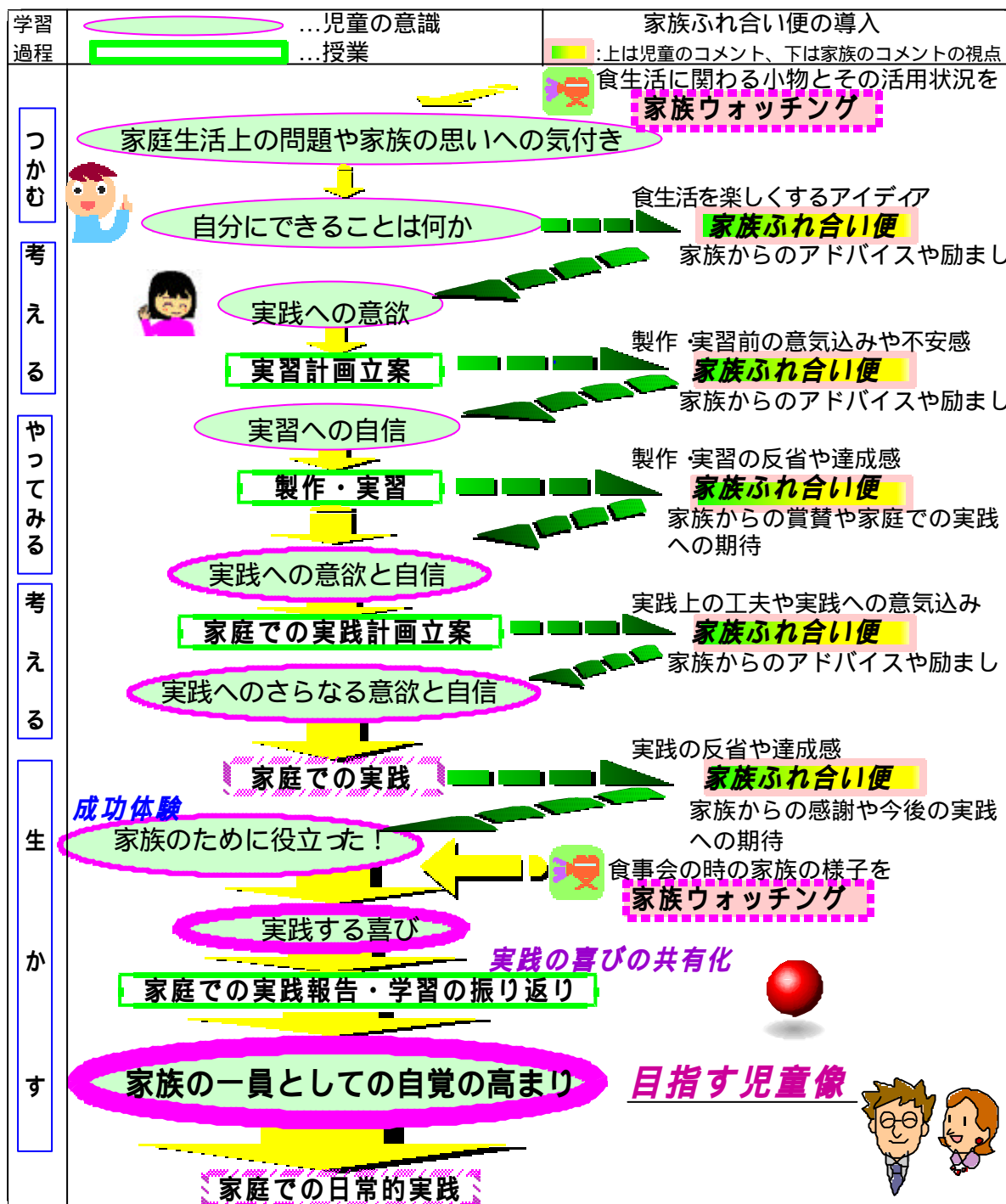


図3 研究の構想

3 『家族ふれ合い便』の作成と活用

(1) 『家族ふれ合い便』の特徴

『家族ふれ合い便』をワークシートの形式にしたのは、ファイリングが可能であり、家族

のコミュニケーションの積み重ねを視覚的にとらえやすいからである。全12ページとし、A4サイズ1枚のワークシートの中には、図4に示すように次の要素を取り入れる。

- 「家族ウォッチング」による気付きや家族から聞いて分かったことを記録する観察欄
- それに基づき学習作業をするワーク欄
- 学習過程における自分の思いや考えを記入する自分の気持ち欄
- それに対する家族の思いや助言などを記入してもらうメッセージ欄

これにより、自らの気付きに基づく主体的な活動を家族の協力を得ながら行っていくことを、常に児童に意識させることができると考える。また、自分の気持ち欄や家族からのメッセージ欄に何を書けばよいかを焦点化するために、記入することの視点を書き添える。さらに、家族からのメッセージを受けた児童の意識がどのように変わったかを見るために、メッセージを読んでからの自らの気持ちを記入する欄も設ける。

児童は、授業や家庭で必要事項をワークシートに記入し、クリアシートに1枚ずつファイルする。そして、自分が記入したことへのコメントを家族にお願いし、次の学習活動や家庭での実践に生かすようにする。

(2) 『家族ふれ合い便』に期待するもの

【児童にとっての『家族ふれ合い便』の価値】

自分の存在や行為への家族の関心を集め、ふれ合いの場を確保することができる。

検証計画

見通し	検証の観点	検証の方法
1	食生活に関わる布製品と家庭での使われ方、食事の組み合わせ方やご飯とみそ汁の作り方、食事の雰囲気や「家族ウォッチング」により観察して『家族ふれ合い便』に記録したことにより、家庭生活を形成する事柄や家族の思いに気付き、学習活動に生かすことができたか。	<ul style="list-style-type: none"> ・家族ふれ合い便：観察欄の内容分析 ・話し合い活動における言動分析 ・意識調査の分析
2	小物作りやご飯とみそ汁作りの実習計画の立案段階、家族のための食事会の実践計画の立案段階において『家族ふれ合い便』を活用して家族間でコメントのやり取りをしたことにより、家族の期待を感じ、実践への意欲や自信を高めることができたか。	<ul style="list-style-type: none"> ・家族ふれ合い便：自分の気持ち欄の内容分析 ・製作や実習活動における行動分析 ・意識調査の分析
3	実習後や家庭での実践において「家族ウォッチング」や『家族ふれ合い便』を活用したことにより、家族のために役立ったことを実感して喜びと感謝、家族の一員としての自覚を高めることができたか。	<ul style="list-style-type: none"> ・家族ふれ合い便：自分の気持ち欄の内容分析 ・意識調査の分析

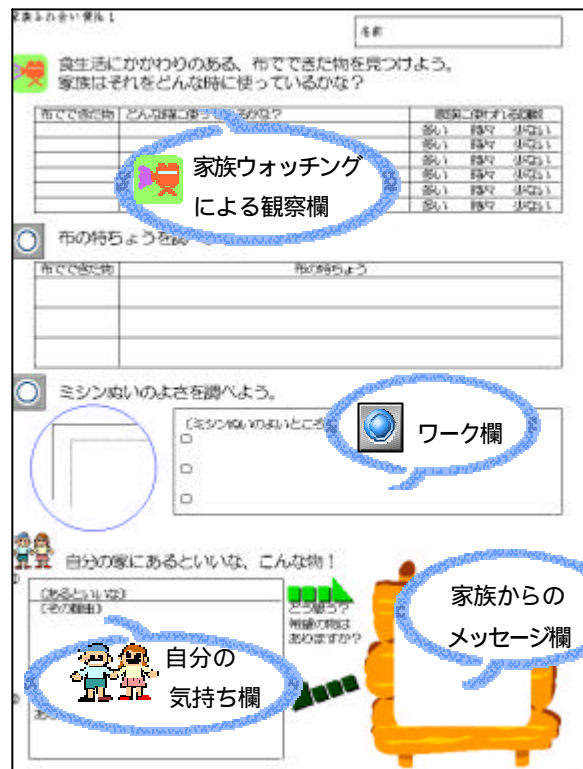


図4 ワークシート『家族ふれ合い便』(1)

家族の励ましや助言、賞賛の言葉を形に残し、いつでも繰り返し見ることができる。

【教師にとっての『家族ふれ合い便』の価値】

家庭での児童の実践の様子を把握でき、個に応じた支援や評価がしやすくなる。児童と家族のコメントを学級便りで紹介することで、保護者の意識をより高められる。

【保護者にとっての『家族ふれ合い便』の価値】

子どもの学習状況や思いを知ることができ、親子の共通の話題が増える。

指導の実際

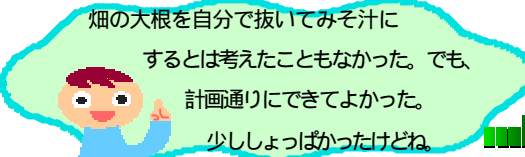
1 授業実践

対象	藤岡市立美土里小学校 5年3組 28名	期間	平成15年9月9日～12月9日
題材名	家族のために作って楽しく、作っておいしく	時数	22時間

2 授業実践の記録

過程	場面	時間	指導内容	主な学習活動と児童の反応	『家族ふれ合い便』への 家族からのコメント
つ か む	学 校	1	2学期の学習内容と『家族ふれ合い便』の活用の仕方 楽しい食生活にするためにできること	仕事をした時の家族の反応を思い起こす。 ほめられてうれしかった お母さん少しは楽しめたかな 他にも何かできることがあるよね 家族ふれ合い便 おもしろそうだね	『家族ふれ合い便』への家族からのコメント
	家 庭		(家族ワークショップで布製品の活用法を観察させる)	《児童が見つけた食生活に関わる布製品》エプロン・台布巾・布巾・ティッシュカバー等よく使われる物、コースター・ランチョンマット等あまり使われない物	
	学 校	2 3	布の種類や性質、ミシン縫いの特徴 食生活を楽しむ小物への関心を高める。	布製品を見たり触れたりし、布やミシン縫いの特徴を話し合う。 持ち寄った布製品でテーブルコーディネートする。 ランチョンマットがあると	あったらテーブルが明るい感じになるね。
家 庭		(小物のアイデアを家族と相談させる)	きれいだし、机も汚れなくていいかもね 親指のところが難しそう 鍋つかみが2組あれば、一度に2人使えるよ ただ鍋つかみに決めた	2組あったらお手伝いしてもらって便利だね。楽しみです。大きめに作ってね。	
考 え る	学 校	4 5 6 7	食生活を楽しむ小物作りの計画立案 ミシンの安全な取り扱い方・基本的な操作	形や縫う方法などを工夫して計画を立てる。 ミシンの基本的な操作を練習する。下系の巻き方とセットの仕方、ミシン針のつけ方、上系のかけ方と下系の出し方、返し縫いの仕方、角の曲がり方、直線縫い	トートバッグは重たい物を入れても破れないように、ミシンでしっかり縫ってね。
	家 庭		(縫い方などについて家族と相談し、計画を見直させる)	結構うまくできたよ。ミシンで縫うと、きれいだししっかり縫えるね キャベツを入れても大丈夫のようにひものところを何回も縫えばいいんだね	
	学 校	8 9 10	布の裁ち方、印の付け方、ミシンの操作、アイロンの使い方	計画に従って小物作りをする。 大事な手紙が整理できるって期待されているんだ。ポケットに家族の名前をつけよう	いいね。それ喜ばれそう。私もそうしようかな
生 か す	家 庭		(作品を家族が使っている様子を観察させる)	できてうれしい！早く使ってほしいな 喜んで使ってくれてよかった。お父さんとお姉ちゃんの方も作りたい。 お母さんがエプロンを着て食器を洗ったり揚げ物をする時に使ってくれる。毎日使ってくれるのでうれしい。妹も遊びで使ってくれる。クッションを作ったらお父さんも使えるかな。	すごく上手にできたのでびっくり。食事をするのが楽しくなったよ。家族全員分があるといいな。 ひもが自由に調整できてとても使いやすい。赤い色も使ってみるとステキだね。

学校	11	成功体験の共有化 小物のよりよい活用 の仕方への関心を高める。	家族ふれ合い便の家族とのやり取りを振り返り、意見交換する。 家族みんなが使ってくれるのはうれしいよね 毎日使ってもらえる 買い物袋はみんなが必ず行く所に行ったり料理したりと作ったかみがある 置けば目につくよね するといいんじゃない	作った物を自分 でも使って、買
	家庭	(食事の組み合わせなどを観察させる)	《児童の気付き》 ・おいしく食べられるように毎日違うおかずを作っている。 ・ご飯には、みそ汁とおかずがいつもある。 ・肉と野菜のバランスがいい。	
学校	12	栄養的特徴と体内での働きによる食品の仲間分け	食事の組み合わせについて調べたことを発表する。	
	13	食品を組み合わせる必要性	なぜ食べるのか、なぜ組み合わせるのかを考える。	
家庭	14	(ご飯の炊き方について、家のやり方を調べさせる)	米の洗いや、米と水の分量、米の浸水時間などについて観察して気付いたことや、聞いて分かったことを記録する。	
	学校	14	米の洗いや、米と水の分量、浸水時間のそれぞれについて対照実験の計画を立てさせる。	おいしいご飯を炊くための課題を決め、試す計画を立てる。水が透明になるお父さんが固いご飯がお米を一晩水につけているまで洗う?家はそ好きなのでいつも固めだ家もあれば、といですぐうでもなかったけど水加減の問題だね炊く家もあるんだねたなあ
学校	15	おいしいご飯の炊き方	おいしいご飯の炊き方を、対照実験によって味や軟らかさなどを比較してまとめる。	
	16	・方の手順・火加減やポイント		
家庭	16	(みそ汁をおいしく作るための工夫について調べさせる)	《児童が調べたおいしさの秘訣》 ・具たくさん ・具の固さによって入れる時間を変える ・みそは最後に少しずつ汁で溶いて入れる ・みそを入れたら沸騰させない	図6 実験結果を記録している様子
学校	17	にぼしを使っただしの取り方、材料の切り方と入れる頃合い、みその扱い方	調べたことの中から共通性のあることを取り入れて、おいしいみそ汁の作り方をまとめる。	
学校	18	ご飯とみそ汁の2つの調理を同時進行させるためのポイント	ご飯とみそ汁の調理実習の計画を立てる。	
家庭	18	(ご飯とみそ汁の実習計画を家族に見てもらおう)	自分の仕事に責任を持って頑張るつもり。お母さんが作ってくれるようなみそ汁になるかな	友達と協力すればおいしいのができるよ。
学校	19	調理器具の安全な扱い方	ご飯とみそ汁の調理実習をする。	畑の大根をぜひ自分で抜いて作ってね。
	20	(実習の感想を伝え、家庭での実践に向けて家族の希望を調べさせる)	初めて作ったみそ汁はおしかったよ。今度は家で作るからお楽しみに ご飯がおいしく炊けたよ。ご飯炊きはまかせてね 何とかやってみよう おいしいのができるように頑張る	うまく作れてよかったね。家でおいざり大会をしてみよう。
学校	21	家族の希望や友達のよいアイデアを生かした実践計画の立案	家族との楽しい食事のために自分にできることを考え実践計画を立てる。みそ汁の具の組み合わせは... コースターを家族分作って、 サラダのドレッシングは手作りにして... ご飯は炊飯器で炊いて、おかずも学校の楽しい話をしながら... あった方がいから ゆで卵を作るのかな とにかく頑張ります	計画はバッチリできてるみたいなので、後は愛情を持ってね。 作る前に必要な材料や道具を用意しておくで手早くできるよ。
家庭	21	(実践予定日を家族と相談し、実行させる。食事会の準備や食事会の時の家族の様子を観察させる。)	準備は大変だったけど、みんな楽しそうだった自分も楽しかった おじいちゃん、お母さん、お父さん、 親戚のおじいちゃんにとぎやかに楽しくできてよかった。また食事会をしようね	家族そろって楽しくできてよかったね。 片付けまで一緒にちゃんとやれたね。 みんながおいしいと言いながら食べたので、いつもより本当においしく感じられましたね。

		 <p>畑の大根を自分で抜いてみそ汁に するとは考えたこともなかった。でも、 計画通りにできてよかった。 少ししょっぱかったけどね。</p>	<p>お母さんが作った味とほとんど同じ でびっくり(母) 大根に味がしみていて よかった(兄) おいしかったよ。また 作ってね(姉) うまかった(父)</p>
学校	22	家庭実践の報告と実践の喜びの共有化	家庭での実践を聞き合い、家族のためにこれからも続けてやってみたいことや新しくチャレンジしたいことを考える。
		ふれ合い便に書くたびにお母さんがいろいろと書いてくれてうれしかった。時々お父さんやお兄ちゃんも感想を書いてくれた。ふれ合い便ファイルを見るとなつかしい気がする。	みそ汁作りが楽しかった。家族と一緒に買い物に行っておれこれ言いながら具を決めたから。いつも材料を考えたり作ったり片づけたりするお母さんはすごい。ふれ合い便にもアドバイスをたくさん書いてくれるのでいつも楽しみだった。できることをやってお母さんたちを喜ばせたい
		自分がすることを、家族が応援してくれたり喜んでくれたのがすごくうれしかった。お父さんは帰りが遅いけど、ぼくが作ったみそ汁を飲んで「おいしかった」とふれ合い便に書いてくれた。	

児童の発言及び児童・家族の記入文は、主だったものを記載した。

結果と考察

1 研究の見通し1 導入段階での「家族ウォッチング」の導入 について

意識調査の結果から、8割強の児童は「家族ウォッチング」という観察行動に関心を持ち^(図7)、観察したことを授業や生活の中に役立てようと努力していた^(図8)ことが分かった。『家族ふれ合い便』の観察欄を見ても「家族ウォッチング」への取組は比較的良好で、与えられた視点について見たり聞いたりしたことを細かく記述することのできた児童が多かった。特に食事の組み合わせについての観察では、色どりや栄養的な価値に触れる気付きのある児童もいて、授業のねらいに迫る重要な役割を果たした。また、観察して調べてきたことを発表する場面では、自分の家との類似性や相違点を見つけながら聞き、自分の家ではなぜそうするのかを考えて話し合うことができた。以上のことから、「家族ウォッチング」は家庭生活を形成する事柄や家族の思いに気付くことに有効であったと考える。

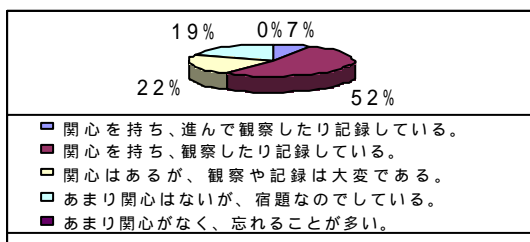


図7 児童の「家族ウォッチング」への取組の様子

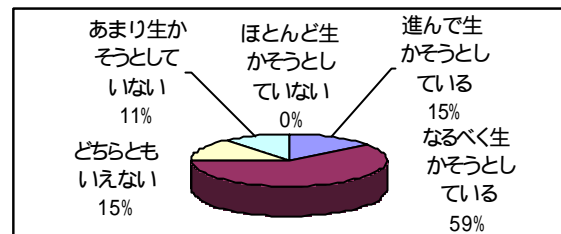


図8 児童の「家族ウォッチング」の授業や生活への生かし方

2 研究の見通し2 計画立案の段階での「家族ふれ合い便」の導入 について

『家族ふれ合い便』の家族からのコメントは、多くの児童にとっての楽しみであった^(図9)。

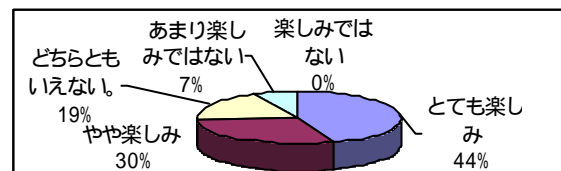


図9 家族からのコメントを待つ気持ち

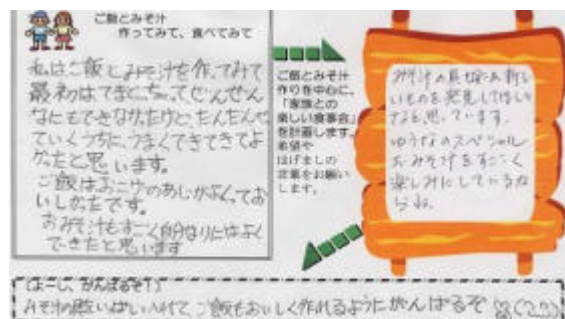


図10 計画立案の段階での「家族ふれ合い便」でのやり取り

授業実践の記録にもあるように、この段階での家族からの期待感を込めたアドバイスは児童の実践する意欲を高め、喜びを伴って積極

研究の成果と今後の課題

1 成果

『家族ふれ合い便』が家族のコミュニケーションに役立ったことを、児童の約7割、保護者の約9割が実感できたと言える(図14)。実践報告会ではファイリングされた『家族ふれ合い便』を大事そうに抱え、「家族に喜ばれてうれしい」「ほめられて気持ちがいい」等の互いの喜びを共有し合っていた。ワークシートという視覚に訴える手段が家族間の思いを明確にし、「今後もできることを続けよう」という児童の気持ちを強めた。保護者からも「親子で話す機会と会話が増えた」「日頃話さない部分も伝わってくる」「家事を進んで手伝うようになった」という感想が聞かれた。形に残る家族の触れ合いは児童の心に浸透し、家族の一員としての自覚を高め、能動的に家族とかかわろうとする生活態度を育んだ。



的に計画に生かされた(図10)。また、実習や実践前に抱えていた不安を払拭し、自信を持たせる効果があった。家族も計画書や完成した小物、食事会への取組を通して、子どもへのコメントが授業や家庭で生かされていると感じている(図11)。コメントの記入に関心を持って取り組んだ保護者が4人中3人いたことも(図12)、この実感によるものと考えられる。以上のことから計画立案の段階での『家族ふれ合い便』の導入は、児童に実践への意欲と自信を持たせ、高める効果があったと言える。

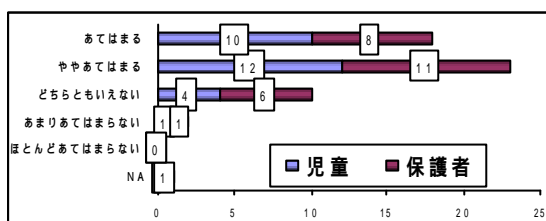


図11 家族のコメントは、授業や家庭で子どもに生かされている

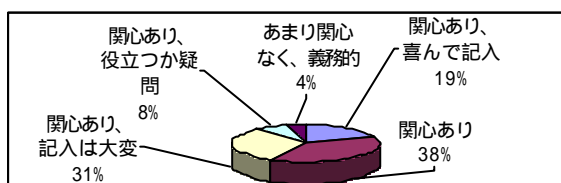


図12 保護者が『家族ふれ合い便』に記入する思い

3 研究の見通し3 実習・実践後での「家族ウォッチング」と『家族ふれ合い便』の導入について

児童は、家族からの励ましやアドバイスを受けて自信を持って学校での製作や実習に臨み、その成果を家庭に持ち帰って実践した。技能の定着に個人差はあるが、『家族ふれ合い便』の自分の気持ち欄から、多くの児童が達成感を持ったことがうかがえる。さらに「家族ウォッチング」や『家族ふれ合い便』のコメントから、自分の頑張りが家族に認められたことを視覚的にも掴めた児童は、「今後もできることをしよう」という家族の一員としての自覚に目覚めた(図13)。

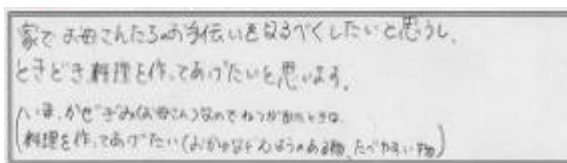


図13 『家族ふれ合い便』12への児童の記入文

図14 『家族ふれ合い便』は家族のコミュニケーションに役立つ

2 今後の課題

家族のコメントに期待感を持てるか否かが授業や家庭実践への取組に影響するため、適切な記入ができるよう、さらに『家族ふれ合い便』の記入欄の焦点化を図っていきたい。

【参考文献】

- 水野香代子・橋本都編著『新しい教育課程の展開 小学校家庭科 基礎・基本と学習指導の実践』 東洋館出版(2002)
- 有園格著『「生きる力」を育てる学習指導』ぎょうせい(1997)
- 西岡加名恵著『教科と総合に生かすポートフォリオ評価法』 図書文化(2003)

指導者 指導主事 伏見 和枝